ヒルファディング（1915—1918）

—ハプスブルグ帝国の第1次世界戦争時代—

倉田　稔

目次

はじめに
1. 第1次世界戦争とオーストリア社会民主党
2. ヒルファディングの帰還
3. イタリア戦線
4. ティロル
5. 軍事状況
6. 野戦病院
7. アメリカの参戦
8. ロシア革命
9. 終戦の年

はじめに

本稿は，ルードルフ・ヒルファデイング（1877～1941）が，主にハプスブルグ帝国の軍医として従軍した時期における，かれのライフ・ヒストリーである。[1]

(1) 筆者は，今まで若きヒルファディングの伝記を，以下の作品で書いて来たので，参照願えれば幸いである。
「ルードルフ・ヒルファディングの伝記的新資料」(『三田学会雑誌』第65巻第10号)
「若きヒルファディング」（『季刊社会思想』1973年，第3巻第2号）
「ドイツ社会民主党とストライキ論争」（『労働運動史研究』第59号，労働旬報社 1976年）
「ヒルファディングと『金融資本論』の時代」（『歴史学研究』第418号，1975年3月）
「第一次世界戦争とヒルファディング」（『商学討究』（小樽商大）第27巻第2号 1976年10月）——本稿は，この稿の継続である。
『金融資本論の成立』（青木書店 1975年）

1. 第1次世界戦争とオーストリア社会民主党

第1次世界戦争の直接のきっかけは，オーストリア＝ハンガリー二重帝国とセルビア国との間でつくられた。この「直接の原因は，南スラヴ民族の自由と統一の熱望とハプスブルグ帝国の衝突であった。[2]」いわゆるサライェヴォの「悲劇」[3]がそれである。

ボスニア州とヘルツェゴヴィナ州（現在ユーゴスラヴィアに属する）は1908年にハプスブルグ帝国に併合されていた。ボスニアの首都サライェヴォで，隣国セルビアの過激な民族主義的結社「統一か死か」のメンバーが，1914年に，ハプスブルグ皇位継承者フランツ・フェルディナント Franz Ferdinand 大公[4]とその妃を射殺した。大公とその妻の遺体がウィーンに戻ると，ウィーンでは反セルビア感情が噴出した。外交史上はこの事件が戦争の導火線に火をつけた。

第1次世界戦争の勃発が，オーストリア社会民主党にどのような作用を与えたのであろうか？

合法的労働者党や労働組合が組織的に発達・増大すると，労働官僚が発生する。すなわち国会議員，地方議会議員，行政活動家，党専従役員・職員，そしてこれに加えて，党働組合の役員・専従活動家の層である。かれらは，労働者運動とその発展によって直接扶養される層である。これらの労働官僚だけではなく，間接に扶養される層も発生してくる。

労働官僚たちは，どんな活動でも，合法性を破るような大衆の活動は，危険とみなすようになる。権力側の弾圧によって，それまで営為築きあげてきたかれらの成果が危うくされ，あるいは失うことになるからである。かくして，労働官僚たちは，はじめのうちは労働運動のために生きていたが，次第に労働運動によって生きるようになる。

(2) Otto Bauer, Die Österreichische Revolution. in: *Otto Bauer. Werkausgabe*, Band 2, Europaverlag Wien 1976, S. 493.
(3) オーストリア側では悲劇とよび，ユーゴスラヴィアでは英雄的行為とよんでいる。
(4) Vgl. Emil Franzel, *Franz Ferdinand d'Este*. Wien 1964.

戦争は，この点で問題を最も鋭く提起する。国が戦争を決定すれば，反戦活動は非合法となり，これまでの合法組織は壊滅する。もちろん非合法政党・非合法組合はこの心配はないわけである。ドイツ社会民主党（ＳＰＤ）も，オーストリア社会民主党（SPÖ）も，これは例外でなく，両党とも結局戦争に協力してゆくのであった。

ただSPÖは，１点においてSPDと違って，特殊な状況にあった。すなわちSPÖはこの時帝国議会に出席できなかったのである。オーストリア首相シュテュルク Stürgkh は，1914年の３月に例外法をもって帝国議会を休会させていた。これによって政府は，無制限な新聞検閲，市民的権利の制限，集会の禁止，等が可能になった。一種の政府独裁であった。戦争の勃発した時，SPÖは帝国議会の演壇で自らの主張を述べられなかったのである。SPÖはその代り，刊行物でその意見を主張した。

オーストリアの憲法は，戦時中このために実施されなかったし，R. A. Kannは，議会が開かれていたならば，サライェヴォの暗殺の危機から戦争を防げたかも知れない，と書いている。(5)

戦争以前のSPÖの特徴は，革命的マルクス主義を外観とし，平和主義を標榜していることにあった。戦争が起きると，党は，もちろん戦争には賛成しなかったが，中央機関紙『アルバイター・ツァイトゥング』は批判性の欠如した論文を掲げた。政府は，ロシア・ツァーリズムから国を護ると保証し，SPÖは次第に戦争歓迎へと向かっていった。党はドイツ党と同じく，ロシア・ツァーリズムが反動の砦であるというマルクスやエンゲルスの昔の意見を，利用していたのである。帝国労働組合委員会は，その組合員に対し，「戦争継続中には，賃金闘争をすべて止めよ」と，呼びかけた。

労働者層は，党と労働組合から離脱するようになり，1914年７月から1916年６月までの２年間に，ウィーンとニーダー・エステルライヒだけで65％の党員を失なったし，その他の地域では74％から80％を失なった。労働組合員数は，

(5) R. A. Kann, *A History of the Habsburg Empire. 1526-1918*, Berkeley/Los Angeles /London 1974, p. 487.

オーストリアで次のような趨勢を示した。[6]

1913年末	41,5195
1914年末	24,0681
1915年末	17,7113
1916年末	16,6937
1917年末	31,1068
1918年末	41,2910

2.　ヒルファディングの帰還

ドイツ社会民主党員で，党中央機関紙『フォルヴェルツ』の編集局員，ヒルファディングは，ベルリンから故郷ウィーンへ戻った。第一次世界大戦が勃発してから，それでもかれは，8～9ケ月は，ドイツ社会民主党で実際活躍していたことになる。後年ヒルファディングは，第一次世界戦争の時代に社会主義運動で「なにもしなかった」，と非難されるが，ハプスブルグ帝国の軍隊にこの時とうとう召集されたのである。時に37才であった。同僚オットー・バウアーもすでに召集されていた。

ヒルファディングは，医学博士の学位をもち，かつては開業医でもあったので，ウィーンではすぐ軍務として病院に勤務したのである。はじめは，ウィーン市内のルードルフスガッセ21番地のルードルフシュピタルⅢであった。カール・カウツキー夫人ルィーゼから手紙が来て，ルードルフはそれに返事を書いた。「ドイツから何かをきくのは大変うれしい……」。病院では内科担当で，「思ったより早く熟達した」といっている。3日毎に24時間の勤務であった。ウィーンに留まれるのは不確かで，ここでは絶えず医師が出てゆく，と[7]書いたように，かれは6月にはもう他の病院（ファヴォリーテンシュトラーセ67番地ウィーン第10区）へ移っていった。これは伝染病の「戦時病院」で，ベッド数2,500の大きなバラック建てであった。「ここには新しいことが何もない」[8]と

(6) Hautmann/ Kropf, *Die österreichische Arbeiterbewegung vom Vormärz bis 1945*, 2. Aufl., Wien 1974, S. 118.

(7) Hilferding an Luise Kautsky, 29. IV. [19]15. Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam（以下 IISG と略），Kautsky Archiv D Part（以下 KD と略）XII 607.

(8) Hilferding an Karl Kautsky, 23. VI. [19]15, IISG KDXII 608.

歎いている。1915年7月29日には，この病院が来週から運営され，午前中は忙がしく，午後は自由になる，と[9]書いている。同15年12月には，第1戦時病院（ウィーン16区，フリュッツェルシュタイク）に移っていることがわかる。

そこからヒルファディングはカウツキーに書いている。「あなた〔＝カール・カウツキー〕がナウマンについてお書きになったとは嬉しいです。その公刊は大変急がれます。」[10]ナウマンの書は，『中央ヨーロッパ』（ベルリン，1915年）[11]であり，カウツキーが公刊するであろう書物は，『中央ヨーロッパ合衆国』（シュトゥットガルト，1916年）である。ドイツは，中央ヨーロッパ構想を持って戦争に臨んでいたので，これら諸作品は時論的に見て重要なものである。

1916年7月1日付カウツキーあての手紙[12]でルードルフは書く，「あなたのご判断を，私はいつものようにお聞きしたい。ひょっとすると，金融資本〔＝ヒルファディング『金融資本論』〕の経済政策篇から歴史を増補・修正して，小冊子として刊行するかもしれないのです。私には材料がすべてうまく入手できるかどうか，すなわち，そこに資本家的植民地〔論〕を加えるべきかどうか，どうもわからないのです。」ルードルフのこの小冊子は刊行されなかったが，かれが『金融資本論』第5篇の増補を考えていたことがわかる。つづいてドイツの運動状況について述べている」。あなたは，諸経過を悲観的に見すぎていると思います。ベルリンの全体会議での諸経過，これについて私は短い報告をまず読んだのですが，……それほど不満足ではないと思います。党委員会へ派遣する二つの反対派グループのベルリン代表者の事件は，まったく正しい示威行為で，今は，方向性の多様さが本質的なものではありません。これを拒絶することは，健全な理性を発揮することをやめることであり，ローザ〔・ルクセンブルグ〕に利用される言質（Denkzettle）になるのです。」

---

(9) Ders. an K. Kautsky, 29. VII. [19]15, IISG KDXII 609.
(10) Ders. an K. Kautsky, 27. XII. [1915], IISG KDXII 610.
(11) Friedrich Naumann, *Mitteleuropa*. Berlin 1915.
(12) KDXII 611. この番号のものには，7月5日付の文章，7月12日付の文章，もある。

3. イタリア戦線

ハプスブルグ帝国にとって世界戦争の前半期に，二つの重要な外交問題があった。一つは，対ドイツとの同盟の調整であり，他の一つは，イタリアが協商国側に加わるのをいかに妨ぐかであった。しかし，1915年5月23日に，イタリアは協商国側に立って，オーストリア＝ハンガリーに宣戦布告をした。オーストリア外交は失敗したというべきである。

1885年に，ドイツ，オーストリア＝ハンガリー，イタリアの間で秘密条約が調印された。この条約によれば，ドイツとオーストリア＝ハンガリーは，イタリアがもしフランスの攻撃を受けた場合，イタリア側に立って行動する義務を負い，一方イタリアは，ドイツに対して同様の義務を負った。またこの条約参加の三国が，他諸国に攻撃された場合，攻撃国に対して宣戦する義務を負った。ただし，イギリスがドイツまたはオーストリア＝ハンガリーを攻撃した場合には，イタリアはこの同盟国を援助しなくてもよいことになっていた。いわゆる「三国同盟」が成立していた。

一方，1904年に英仏協商が，1907年に英露協商が，でき，ここに，三国同盟と三国協商という二大帝国主義グループが存立していたのである。

しかし20世紀に入ってからイタリアが徐々に三国同盟から離反しだしてきた。オーストリアとしては，イタリアが三国同盟の約束を守るであろう，と期待していたが，イタリアと長く領土係争問題をかかえていたので，これは危なっかしいものであった。事実，世界戦争がおきると，イタリアは中立を宣言した。同盟国側と協商国側は，イタリアを味方につけるべく競い合ったが，イタリアは協商国についてしまった。1915年4月26日にイタリアは，ロンドンでイギリス・フランスと秘密条約を結び，一ケ月以内に参戦する，と署名した。イタリアが協商国側に立った理由の1つは，協商国側が同盟国側よりも戦勝後の領土について好条件の提案をしたからであった。[13]

---

(13) Cf. A. J. P. Taylor, *The First World War*, Harmondsworth 1970, 邦訳，テイラー『第一次世界大戦』新評論社（予定）。

イタリアは，5月23日，オーストリア＝ハンガリーに宣戦布告した。この時ヨーロッパに，またはオーストリア＝ハンガリーにとって，新しくイタリア戦線が発生したのである。

4.　ティロル

イタリアがオーストリアに宣戦布告した時に，ヒルファディングはちょうどウィーンについたばかりの頃と思われる。そして，それから1年余りウィーンで軍医として勤務していたわけであり，少なくても1916年の7月までウィーンに，家族とともにいた。おそらく，7月の下旬には，ティロルへ向った。その理由は，もちろんイタリア戦線の発生によっている。かれは，ティロル地方ブレンナー河畔シュタイナッハの緊急予備病院の，国民軍医（Landsturmarzt）として赴任した。8月1日にはすでにそこにいた。[14]

ティロルは，オーストリアの一番奥深い西部にあり，アルプス地方である。西から東へ，イン河が流れ，その河畔にあってティロル最大の都市はインスブルックである。このイン河に，インスブルック付近で，ブレンネル河が南から注ぎ込む。そこからブレンネル河にそって南下することおよそ 20km に，シュタイナッハがある。シュタイナッハから南へ 10km の所に，交通の要所ブレンネル峠があり，これは現在のオーストリアとイタリアの国境をなしている。当時は，もちろん国境ではなかった。すなわち，ハプスブルグ帝国は終戦まで南ティロル，すなわち北イタリアの一部を領有していたからである。

5.　軍事状況

ハプスブルグ帝国は，戦争を開始してから，まず当面の敵であるセルビアに攻撃をかけた。1914年中に合計3度の攻撃をしたが，成果は小さかった。むしろ連敗した，といった方があたっていた。この3連敗によって帝国の威信は失墜した。

---

(14) Hilferding an K. Kautsky, 1. VIII [19]16, I ISG KDXII 612. Feldpostkorrespondenzkarte.

ロシア軍は，東プロイセンに攻め込み，タンネンベルグの戦いで敗北した。だがロシア軍は，ハプスブルグ帝国の東北部ガリチエンを攻撃し，これを占領した。

イタリア戦線が生じると，帝国はロシアとイタリアに対する攻撃を行ないはじめた。対イタリア戦線には，当初10万人のハプスブルグ軍が国境を守備していただけであった。守備隊は，二つの部分にいた。第1は，トレンチーノとして知られる南ティロルであり，クラウス将軍とダンクル将軍が卒いていた。第2は，ボレオヴィチ将軍が指揮をした，戦線の東方で，イソンツォ川の谷とトリエストへいたる地域であった。2つの地域とも，軍事的には，防衛にまわったオーストリアに都合がよかった。というのは，自然環境が荒く，山岳地帯であり，雪と氷でおおわれていたからである。雪の上での闘かい，そして，単調で，のろい闘かいでは，両軍とも闘かっても利は小さかった。

オーストリアは，師団の数が少ないうえに，輸送力で損をしていた。というのは，この戦線は，帝国の辺境に位置していたからである。一方，イタリアとしては，これは国内戦線だといってよかった。イタリアの軍隊では，1914年6月以来，参謀長カドルナ Cadorna 将軍が軍事戦略の指導をとった。かれの考えは，北で防衛し，東で攻撃することであって，トリエストとライバッハを取ることが大目標であった。[15]

カドルナは，1915年6月おそく，イソンツォ川に向かって断固攻撃をした。それは，この年行なわれた4回の攻撃の，第1回目であった。戦争中，イソンツォ川攻撃は11回行なわれたが，オーストリア軍，とりわけ南スラヴ人は精力的に戦った。1915年のおわりまでに，イタリアはオーストリア軍の2倍の兵を失なった。

1915年から16年にかけて，軍事行動の中心がロシア戦線（ドイツから見れば東部戦線）に移ったので，英・仏はその間，西部戦線で，兵力を補給することができた。ドイツは2正面作戦を行なう力はなかったのである。1916年2月末，

(15) Arthur J. May, *The Passing of the Habsburg Monarchy. 1914-1918*, 2. vols. Philadelphia 1966, vol. 1, p. 104.

ドイツ軍はヴェルダンを攻撃したが，フランスの防禦線を粉砕できなかった。7月と9月に，英・仏軍は，ソンムでドイツ軍に打撃を与え，10～12月にフランス軍はヴェルダンを反撃しドイツ軍を完全に駆逐し，ヴェルダン攻撃を断念させた。これには，ロシア軍の南西方面軍も援護攻撃を行なった。ロシア軍によって，オーストリア＝ハンガリー軍の相当部分が壊滅したので，ドイツ軍は，ヴェルダン会戦という最も重大な時に東部戦線に兵力を投入せざるをえなかったし，オーストリア軍もイタリア戦線から6個師団をロシア戦線に移動させた。それにもかかわらず，ロシア軍は，オーストリア＝ハンガリーに猛攻を加え，陣地線を突破した。

1916年3月，イタリア軍は，ヴェルダンで攻撃されているフランス軍を援助するため，イソンツォで新たに攻撃を開始したが，失敗におわった。

1916年5月，ハプスブルグ参謀総長コンラット・フォン・ヘッツェンドルフは，イタリア攻撃を行なうことに決めた。この作戦をドイツは拒否した。なぜならドイツはフランスの中央部を撃つ計画をもっていたからであり，イタリア戦線はドイツの直接の関心ではなかった。ヘッツェンドルフは，やむなく単独攻撃をした。いわゆるトレンティーノ攻撃である。5月15日，大兵力を集中してガルダ湖とブレンタ河の間で攻撃を加え，イタリア軍は敗走した。オーストリアは，アシアジェ平原を占領した。このためイタリア首相サランドラは辞任した。カドルナ将軍にとって救いとなったのは，この時ロシアがブルシーロフ将軍の攻撃で応答してくれたことであった。このいわゆるブルシーロフ攻撃（6月4日）で，オーストリアの前線は崩壊した。オーストリアはトレンティーノ攻撃を中止し東へ兵力を投入した。ブルシーロフ攻撃は，オーストリア＝ハンガリー軍の志気を喪失させたし，これ以降ハプスブルグはドイツ軍にたよって戦争を続けるようになった。ブルシーロフ攻撃がなく，またドイツがこの作戦に加わっていたならば，イタリアは1916年に破壊しただろう，と言われる。ドイツ最高司令部はこの唯一の機会を見逃したことになる。カドルナは反撃し，失なった領土の半分を奪回し，トレンティーノはかなり収まった。1916年8月6日，カドルナはイソンツォ方面に主要攻撃をかけた。オーストリアは抵抗し

ながらゲルツ（Görz），すなわちイソンツォ川の重要基地に退却した。戦闘は陣地戦となった。

1916年の後半，イタリア軍はイソンツォでその後3回の攻撃を行ない，ゴリツァ（ゲルツ）を奪取したが，トリエストへはドイツ軍とオーストリア軍にはばまれて，進撃できなかった。

1916年8月27日に，それまで中立であったルーマニアは，協商国側に立ち，オーストリア＝ハンガリーに宣戦布告した。1916年の戦闘の結果は，協商国側に有利であった。

6. 野戦病院

ヒルファディングがウィーンからティロルへ配置替えされたのは，この時期であった。もちろん，病院勤務であるから，戦闘にはまったく加わらないし，ブレンナー峠より北であるので，いわば後方勤務で，おだやかであった。かれの生活は，「とくに新しいことは起きていない」[16]し，9月10日ごろは，ウィーンから高校生の息子カールが数日間遊びに来ていたほどである。

ここでヒルファディングは，学術的問題をカウツキーに書いている。「カール・エミールの作品にかんしては，その長さを否認すべきではありません。」[17] ヒルファディングは『貿易政策の諸問題』[18]という長い論文を『ノイエ・ツァイト』に送っていた。カール・エミールは，もちろんかれのペン・ネームである。これは連続論文として7回連載されたもので，いわゆる「崩壊理論」の批判，などを含んでいた。[19] かれは書く，「私の見るかぎり，種々の個別局面で崩壊理論の誤りを証明することが問題となっています。」「もし崩壊理論を救済するローザ〔・ルクセンブルグ〕の試みが黙って見逃されるならば，カ〔ール〕・エ〔ミール〕は正しかったのです。」[20]

---

(16) Hilferding an Kautsky, 10. IX [1916], IISG KDXII 615.
(17) Ders. an Kautsky, 15. IX [19]16, IISG KDXII 616.
(18) Karl Emil [=Hilferding], Handelspolitische Fragen,in: *Neue Zeit* Jg. 35. (1916/17), Bd. 1, S. 5-11;40-47; 91-99; 118-126; 141-146; 205-216; 241-146.
(19) 拙書『金融資本論の成立』（青木書店）で短かくふれている。
(20) 注(17)の手紙。

同じ手紙の中でベネディクト・カウツキー〔カール・カウツキーの息子，愛称ベンデル〕あての文が含まれている。ヒルファディングは教えている。「君は必ず高等数学を学んでおかなくてはいけません。」「それから数学のあとで根本的に近代物理学・化学を勉強しつくし，……それから君に忠告しますが，ランゲの『唯物論史』[21]を読むこと，そしてシュヴェーグラー[22]かあるいはフォアレンダーの[23]『哲学史』，そうしたら哲学者自身をはじめる，すなわちショーペンハウエルの『充足根拠の原理』[24]，『倫理』[25]などを。」とすすめている。これらは，ヒルファディングの基礎教養の一部をのぞかせるものでもあろう。ランゲやフォアレンダーは，いわゆる新カント派哲学者であり，ヒルファディングはヨリ若い頃これらの著作をよく読んだのであろう。すでに記した[26]ように，ヒルファディングたちのグループは，新カント派社会主義であった。

ティロル地方は冬が早い。この年ここでは9月20日から雪が降りはじめ，大変寒くなった。妻マルガレーテは数日ここを訪れるはずであった。またヒルファディングは，ここシュタイナッハには10月20日までしかいない，と書いている。[26]

10月25日にはすでに移動伝染病院 Nr. 2 に移っている。これ以降ここで勤務をつづけているように思われる。ただし予備病院『イェーゲルンドルフ』発のはがきも時々あり，その二つの病院の関連は不明である。

「というわけで，私は新しい場所に来ています。ここはまた美しく，仕事の関係はとてもよくなるはずです」[28]。ここでも，かれはカウツキーに書籍を所望

(21) Friedrich Albert Lange, *Die Geschichte des Materialismus...*
(22) Albert Schwegler (1819–1857), *Geschichte der Philosophie im Umriss.* 1. Aufl., 1847; 14. Aufl., 1887.
(23) Karl Vorländer (1860–1928), *Geschichte der Philosophie.*
(24) Arthur Schopenhauer (1788–1860), *Ueber die vierfachen Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde.*（短かくは *Satz vom zureichenden Grunde* であるが，ヒルファディングは，Satz von der vierfachen Wurzel と書いている——ように読める。）
(25) Ders., *Die beiden Grundprobleme der Ethik.*（ヒルファディングは Ethik とのみ書いている。）
(26) 拙稿「若きヒルファディング」（『季刊社会思想』3—2）。
(27) Hilferding an Kautsky, 21. IX [19]16, I ISG KDXII 617.
(28) Ders. an Kautsky, 25. X. [19]16. I ISG KDXII 620.

したり，『ノイエ・ツァイト』の必要な号を送るよう頼んでいる。[29]

この頃かれは，ドイツ社会民主党党首で，友人でもあるフーゴー・ハーゼ（Hugo Haase）のことをいつも書いている。また，親友オットー・バウアーのことを心配している。なぜなら，オットー・バウアーは，ロシア軍の捕虜として抑留されていたからである。バウアーは，戦争勃発後予備役大佐として召集され，ガリチエンで対ロシア戦に参加した。1914年の11月23日にロシア軍に捕まった。まずバイカル湖の東のベレゾウカへ，そして数ケ月後には，蒙古国境に近いトロイツコサウスクへ送られた。[30] ヒルファディングは書いている，「オットーは，いつでも私の支えです。かれの帰還がまだ咎められるという危険はもちろん大そう大きいです，また，かれがそれを克服するために状況がいくらかでも好転するかどうかは，まだ全く不確かです。」そして時局についてふれている。「平和の提案は，一つの歴史的行程です。……今やたしかに戦争の全盤的尖鋭化がやってくるはずです，そして議会では熱狂が増大するでしょう。フーゴー〔・ハーゼ〕の声明は良かった。」[31] ここに言う，平和の提案とは，1916年12月12日のドイツ政府の平和提案[32]であろう。1916年の秋から交戦諸国の中で平和討議がおきてきた。その理由の一つは，決定的勝利の見込みがないとわかりはじめたからであった。ドイツ政府（あるいは中央列強）の平和提案は，12月12日のドイツ帝国議会の前日に突然提起された。議会で帝国宰相が説明したが，勝利への強硬な態度と具体的平和条件なしで，敵側諸国と平和交渉してもよいというものであった。「ハーゼの声明」とは，この際ハーゼが行なった警告のように思われる。

一方，ハプスブルグ帝国にとっても，1916年の末は，戦争の外交的転換期を示した。第1の契機は，皇帝フランツ・ヨーゼフ1世（Franz Joseph I，在位1848～1916）の死去（11月20日）であった。老帝は，ドイツと固く同盟しつ

(29) Ders. an Kautsky, 21. XI. [19]16, I ISG KDXII 621.
(30) Vgl. Julius Braunthal, Otto Bauer. Ein Lebensbild. in: *Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk,* Wien 1961.
(31) Hilferding an Kautsky, 20. XII. [19]16, I ISG KDXII 627.
(32) フリッツ・フィッシャー『世界強国への道』I，岩波書店1972年，367ページ以下。

つ，戦争を遂行しようとしたが，次に即位したカール1世（Karl I.）は，ドイツの軍事同盟を追求せず，戦争の休止・和平の努力を模索しようとしたのである。

ヒルファディングは書いている。「個人的な事ですが，私は大変元気で，ウィーンよりもこちらの方がずっと好きです。医療の点でもまったく面白いです。」かれはチフス部門，それからヂフテリアその他も扱っていた。「個人的には，勤務の境遇はとても気に入っています。」[33]

7.　アメリカの参戦

1916年末，アメリカ合衆国でウィルソン（Thomas Woodrow Wilson 1856—1924）が大統領に再選された。アメリカの資本家階級は，世界戦争への参加を早めようと欲していた。ウィルソンは，中立主義を掲げ，戦争を押しつけられることは自分の意に反する，というポーズをとり続けていた。だがドイツ政府が1917年2月1日に無差別潜水艦戦を宣言したために，2月2日アメリカはドイツと外交関係を断絶した。そして4月6日アメリカはドイツに宣戦布告した。もっとも，積極的に軍事介入したのは，1918年からであった。

ヒルファディングは，1917年1月31日にカウツキーに書いた。「非常に興味あるのは，ウィルソンの外交とそのとりあげ方でした。この民主的な原理の声明が，まさに初期のドイツとオーストリアの社会主義者によって空想的なものとして片づけられていること，そして，これまでの権力政治一般に反対して向けられることを洞察する代りに，列強グループの一方かまたは他方に対してヨリ向けられるかどうかだけが問われることは，まさに特徴的です。そしてまた特徴的なことは，連合国側がウィルソンと同結して，『同〔盟国〕』に反対していることです。」[34]

ウイルソンは，1916年12月18日に，全交戦国の政府に向かって，戦争目的をあきらかにするよう提議した。ヒルファディングの手紙はこれを指しているものと思われる。

---

(33)　注(31)の手紙。

(34)　Hilferding an Kautsky, 31. I. [19]17, IISG KDXII 628.

「ウィーンではすべてが異常なしでした。」とヒルファディングは続ける。かれは，ウィーンをこの時訪れたのである。「私は，フリッツ〔＝フリードリヒ・アドラー〕に会い，およそ ¾ 時間話しました。[35]」フリードリヒ・アドラーは，ヴィクトル・アドラーの実子である。かれは，戦時中オーストリア社会民主党指導部にできあがった左翼の指導者となり，1916年10月21日，オーストリア首相シュテュルクを射殺した。アドラーは死刑を宣告され，その後18年の懲役にかえられた。ヒルファディングは暗殺事件後のアドラーを訪れたわけである。「オットー〔・バウアー〕については，相当規則的に通信を」得ており，「かれは，元気で働らいて〔あるいは研究して〕います。[36]」バウアーは苦しい捕虜生活を送っていた。その間かれは研究を続け，戦後その成果を著書『資本主義の世界像』[37]として公刊した。

8.　ロシア革命

ヒルファディングは，1917年10月16日にベルリンへゆき，カウツキーと話をしたいと，書いている。[38]

12月3日付の手紙で，カウツキーに書いている。「われわれの病院は，目下の所，増大しています。そのために，私自身は非常に多くのことをしなければならず，ほとんど1日中，私の部局におり，私の歴史的関心は，病気の歴史の作成に」ある，と皮肉を言っている。「マックス・アドラーが，マルクス生誕100年のために，3月に出ると思いますが，『マルクス・シュトゥディエン』第4巻[39]の公刊をいそいでいます。[40]」

われわれの興味からすれば，ヒルファディングがロシア革命をどのように見

(35) Ibid.
(36) Ibid.
(37) Bauer, *Das Weltbild des Kapitalismus*. 1924.
(38) Hilferding an Kautsky, 13. X. [19]17, IISG KDXII 630.
(39) *Marx-Studien*, IV. Band, Erster Halbband, Wien 1918. この巻頭に Max Adler が，Die sozialistische Idee der Befreiung bei Karl Marx. Zu seinem hundertsten Geburtstage am 5. Mai 1918. を書いている。
(40) Hilferding an Kautsky, 3. XII. [19]17, IISG KDXII 631.

ていたかである。

1917年の2月革命で，ロシア・ツァーリズムが打倒された。同盟国側は，ツァーリズムを野蛮なものと見，それに対する戦いを一つの理由にしていたので，ツァーリズムの除去は，協商国側にとってモラルの点で有利となった。2月の革命は，10月の社会主義革命に転化する。ヒルファディングの発言は，この直後のことである。

「ボルシェヴィキについての貴方〔＝カウツキー〕の見解は，論文と同様に，大変，非常に興味深い。」おそらく，カウツキーの見解というのは，12月2日，すなわちこの手紙の1日前にヒルファディングが落手したカウツキーの手紙であろう。それは現在失なわれている。論文とは，Die Erhebung der Bolschewiki[41]のことではあるまいか。

「またそこに私は一つの新しい論拠を見ます，われわれの見方と見解の大いなる一致です。それは，一般的にはロシ〔ア〕革命の，特殊的にはボルシェヴィキの運命における，悲劇的なものです。〔私の〕心はそれでもかれらの側に立っています。」「かれらは以前と違って今や……実際に単独講和を求めようとするのか，そしてかれらは実際に，協商国側に対して持続して中立を主張することができると信じているのか？ そして単独講和は，もし可能な場合（そしてどんな条件で？），他の戦線での戦争の長期化を意味しないのだろうか？」ヒルファディングが発したこれらの疑問は，誰でもが抱くであろう当然なものである。ここで単独講和とは，もちろんドイツとソヴィエト・ロシアとの間のそれである。ドイツが東部戦線で講和をすれば，当然，西部戦線に軍事力を集中できる，という心配がでてくる。

「1905年にトロツキーは，もしロシ〔ア〕の運動が他のヨーロッパでも同じく引き継がれれば，ロシ〔ア〕・プロレタリアートの独裁は可能であった，と考えた。かれは今たしかに同じことを期待しているにちがいない。しかしこの期待は，余り正当ではないように見える。」「なお私が恐れたことは，現在の

(41) *Leipziger Volkszeitung*, 16. XI. 1917.

体制自体〔ロシアの体制——引用者〕が維持され得ないことです。状況はたしかに今だかつてなかったものです，というのは，革命的プロレタリアートと革命〔的〕農民の結合体が，武装して軍隊に組織化されている，そして，将校団は完全に解体している…。それゆえ，権力は，まったくかれらの側にある。しかし，敵対者は，〔ロシアの〕全ブルジョアジーだけではなく，あらゆる他国の国家権力です。また，ドイツが東方作戦をまったく放棄して，ボルシェヴィキにたやすく事をなさしめ，そしてまさにそれによって隣国〔＝ロシア〕で大革命が安定化するだろう，ということはまず考えられるでしょう。[42]」

ヒルファディングは，戦時に不十分なニュース・ソースをもっていただけであったろうが，かれの判断は，ここでは適正である。

だが，ヒルファディングは，ロシア革命に対して，微妙な見方をもっていたわけである。

かれは，トロツキーに手紙をかいた。この時，トロツキーは，10月革命成功の直後，外務人民委員に任ぜられ，ブレスト＝リトフスクの講和会議にロシア側代表として出席していた。だからヒルファディングの手紙を受けとったのは，1917年12月から翌年の1月までの頃であろう。それは，10月革命以降，西欧社会主義者からロシア・ボルシェヴィキへとどいた最初の反響だった。ところがそこで，ヒルファディングは，ウィーンのたくさんいる「ドクトル」のうちで，1人の，ロシアにいる捕虜の釈放をトロツキーに願っていた。これは，もしかすると，オットー・バウアーのことかも知れない。そして，手紙では，革命のことなど一言もふれられていなかった。しかし，Du〔＝君〕で書かれていた。トロツキーは，われとわが目を信ずることができなかった。

ブレスト＝リトフスクの会議が終ってから，トロツキーは，レーニンに会ったが，かれは元気よくトロツキーに尋ねた。

「ヒルファディングから手紙を受けとったそうですね？」

「ええ，手紙を受け取りました。」

「それで？」

---

(42)　注(40)の手紙。

「捕虜になった同国人の釈放を願っているのです。」

「それで，革命については何んて言ってるんです？」

「革命のことは，かれは何も言っていません。」

「何も言ってないって？」

「何んにも！」

「考えられん！」[43]

レーニンは，目を見開いてトロツキーの顔を見つめたのである。

9. 終戦の年

1918年，それは第1次世界戦争の終る年であった。ロシアが戦線から離脱していたため。そのため，同盟国側は一時的に有利となった。もっともアメリカが1918年のなかばからヨーロッパに派兵しはじめた。戦線では脱走兵がふえ，交戦諸国内では反戦気運が高まった。ボルシェヴィキの平和アピールは，諸国人民と国際政治に影響を与えた。すなわち，直ちに戦争への反応策が捻出されねばならなかったのである。1918年1月8日，ウィルソン大統領は講和条件にかんする14ケ条の提案をおこなった。3月から7月にかけてドイツ軍は西部戦線で総攻撃をかけた。しかし，結局勝利できず，反対に7月から戦局は変化しはじめ，協商国が戦略上の優位に立った。9月に協商国が，総攻撃に移った。

ヒルファディングは9月に書いている。「10月のはじめの日々にベルリンにゆこうという希望があります…」。つづいてわれわれの興味をひくのは，フランツ・メーリングの『マルクス伝』[44]に対するかれの見解である。「私は，かれ〔=F. メーリング〕のマルクス伝記を読みました。それは新しいものでは絶対にない。最良のものは，若きマルクスに関する諸章です，すなわち，遺稿出

(43) Leo Trotzki, Mein Leben. Berlin 1930, S. 197-198. トロツキー『わが生涯』I．現代思潮社，1968年，381ページ。
トロツキーは，だからここで「ヒルファディングにとっては，10月革命も，ブレストの悲劇も，かれの同国人のとりなしをする機会に過ぎなかった」と考えた。

(44) Franz Mehring, *Karl Marx. Geschichte seines Lebens.* Leipzig 1918.

版[45]でかれが光をあてたことの総括です。それからのちは，事柄は絶対に不十分です。それら，たとえば，東洋問題に対するマルクスのあらゆる立場，戦争に対するかれの立場，そしてかれがそこで経た発展は，完全に表面的なことにとどまり，多かれ少なかれ一般的に知られたことです。もちろん，シュヴァイツァー[46]やバクーニン〔の問題〕はうまく切り抜けているが，メーリングは，もう貴方やアウグスト〔・ベーベル〕となるとできない——要するに，まさに，かれの叙述は，通俗的で，実際手軽に認める初心者向きの入門書としては，否定できない効用をもちえます，——」「当面，インターナショナルの扱いのように，不十分でまたは誤っているもの，それゆえたしかに余り比重がおかれていないわけですが——この叙述は今こそ科学的伝記を必要にさせます。」

ヒルファディングは，ロシアの社会主義について書いている。「さしあたり，まさに，武器の批判が，批判の武器よりもなお決定的です，そして後者は，ボルシ〔エヴィキ〕に対しては，前者よりもなお急速に決定的になる，と私は推察します。アジア的マルクス主義〔＝ボルシェヴィズム〕がなんと多くの損害をなし，ひき起したのかが，今後盲人にさえ明らかになるでしょう。」[47]これは，レーニン指導の社会主義建設，とりわけ戦時共産主義を指しているのかどうか，判断はむずかしい。

9月には，西部戦線で，協商国側が総攻撃に移り，ドイツ軍が退却した。9月末，ドイツ参謀本部は，大破局を恐れ，休戦提案をドイツ政府との会議上で述べた。協商国との休戦交渉をやりやすくするため，政府を民主主義的に装おうとし，自由主義的といわれたマックス・フォン・バーデンを首相とする内閣を急いで発表した。協商国側では，休戦条件は，国益の相違によりそれぞれ不一致であったが，ウィルソンの14ケ条をもとに講和することに落着した。同盟国側もそれに基づく講和締結を申し出た。

---

(45) ***Aus dem literarischen Nachlaß von Karl Marx. Freidrich Engels und Ferdinand Lassalle.*** herausg. von F. Mehring, 4. Bde., Stuttgart 1902.

(46) Johann Baptist von Schweitzer ラサルの創立した全ドイツ労働者協会の，ラサル死後，会長になった。

(47) Hilferding an Kautsky, 8. IX. [19]18, I ISG KDXII 632.

ところで戦局は，急速に終戦への最後の一押しを与えた。10月には，トルコ帝国が休戦した。イタリア・オーストリア戦線では，イタリア軍が10月24日に攻撃をはじめ，ピアヴェ河の戦線を突破し，オーストリア領内に侵攻しようとした。その時すでに，ハプスブルグ帝国は頻死の状態にあった。カール1世は，なんとか帝制を維持して講和にもってゆこうと試みたが[48]，手おくれであった。帝国内の各国には自立国家が樹立されつつあったのである。兵士は蜂起し，あるいは戦線から脱走して帰郷しつつあった。10月28日にチェコスロヴァキア国家の創設が宣言され，11月14日にチェコスロヴァキア共和国が宣言，大統領にマサリクがなった。10月29日に，すべての南スラブ地方をハプスブルグ帝国から分離させ，独立国家スロヴェニア・クロアチア・セルビアを宣言した。ガリチエンは11月1日に西ウクライナ人民共和国になった。10月30日ハンガリーで革命がはじまり，11月16日ハンガリー共和国が宣言された。オーストリア＝ハンガリー二重帝国は分裂した。帝国の膝元オーストリアでは10月30日にプロレタリアートを主力とする革命的運動がおきた。11月12日に共和国が宣言され，カール1世は退位した。首相はカール・レンナー，外相はヴィクトル・アドラーであった。アドラーは任命後2週間で病死したので，後任としてオットー・バウアーが就任した。

11月3日に，「オーストリア＝ハンガリー司令部は，パドヴァで協商国との休戦協定に調印した。その規定により，オーストリア＝ハンガリー軍は，20個師団を除き，動員解除・解体され，武器・弾薬など軍需品の大部分と，オーストリア＝ハンガリーの河川・海洋艦隊は[49]」協商国軍に引き渡されることになった。

同盟国のトルコとオートリア＝ハンガリーが事実上の降伏をしたため，ドイツのみが残った。ドイツでは11月に革命がおき，11月9日に君主制が転覆した。

ヒルファディングは，依然として第2移動伝染病院から手紙を書いているし

(48) Vgl. Helmut Rumpler, *Das Völkermanifest Kaiser Karls vom 16. Oktober 1918*, Wien 1966.

(49) ソビエト科学アカデミー『世界史』現代1．東京図書，1964年，127ページ。

最後のものは1918年10月28日なので，少くともこの日までは，ティロルで勤務していた。ハプスブルグ帝国の崩壊によって，かれは軍務をその後すぐ解かれたであろう。かれはウィーンに戻った。(注)　（未完）

（注）引用文中のアンダーラインは，原資料どおり。これらの手紙はすべて未発表。
［　］の中は，すべて筆者のおぎない。